



# 嗜虐の花が咲く頃に

～付き合い始めた彼女の  
えっぐい寸止めで射精管理されちゃう～

嗜虐の花が咲く頃に ～付き合い始めた彼女のえっぐい寸止めで射精管理されちゃう～

1

彼女と出会ったのは大学のボランティア部だった。

というか、彼女の存在がなければ、僕がボランティア部に入るなんてなかっただろう。ボランティアなんて偽善の産物でしかないなんて斜に構えているような僕だったから、新入部員勧誘のための飲み会で彼女に会わなければ、そのまま適当なサークルに入っていたと思う。

彼女。

栗栖川つぼみ。

僕と同じ新入生だというのに、飲み会の中でも彼女は落ち着いて見えた。周囲が楽しそうにしているのに、彼女だけは無表情のまま、ぼんやりとウーロン茶を飲んでいて。口数だって少なく、先輩たちに話しかけられてようやく口を開き、それだって数語を発するのみで沈黙してしまう。けっして口べたであるとか陰気であるといった感じではないのだけれど、話す必要があることしか言葉を発する必要性を認めないという態度は、同年代の女性とは異質な印象を受けた。

そう、それがきっかけだったのだ。

僕はつぼみに興味をもった。

彼女がそのままボランティア部に入部したという情報をつかむと、僕もボランティア部に入部することにした。

彼女が部活に顔を出す曜日には必ず部室にいたようにしたし、彼女が参加するボランティアには必ず出席するようにした。

ボランティア部の活動は多岐にわたっていて、その中でも人気のあるものとなないものに分かれる。街頭に立って募金を募ったり、公園のゴミ拾いを行うといったことは人気がなかった。それなのに、つぼみは率先してそういった活動に参加していた。

無口で無表情。

しかめっつらというわけではなく、ただただ表情がない。感情がないロボットみたいに黙々とボランティア活動に勤しむ彼女を見て、僕はどういうわけかますますつぼみに惹かれていった。

\*

僕は警戒されないように少しづつ、つぼみに話しかけていった。

いや、違う。要は怖かったのだ。彼女に拒絶されることが怖かった。

女の人とつきあったこともなかった僕は、だからこそ臆病になって、少しづつ彼女に話しかけることしかでき

なかった。

今日はいい天気だねとか。

明日のボランティア部の活動内容はなんだっけとか。

大きな声を出すことが苦手な彼女の代わりに街頭募金で「募金お願いしま〜す」と声をはりあげたり。

そんなふうにして時間が経過していった。

気づけば2年が経っていた。

あっという間の大学3年生。

この間、進展は何もなかった。

自分の奥手ぶりにつくづく呆れた。2年が経過するまで、僕は告白するどころか彼女をデートに誘うことだってできなかったのだ。

ボランティア部で話しをするだけの毎日。

さすがに2年間も一緒にボランティア活動をしていれば最初の頃に比べて彼女との距離も近くなった気がする。けれども彼女は変わらずに無口で無表情のままだった。とても脈があるとは思えない。告白をしても無駄だ。こうして僕は卒業まで告白もできず、彼女を遠くからじっと見つめるだけで終わっていくのだろう。そう思っていた。

\*

「き、君のことが好きだ。僕と付き合って欲しい」

なんか知らんが告白していた。

ボランティア部の部室。

二人っきりの時、彼女が静かに本を読んでいるところにいきなり僕が告白したのだ。

「……………」

本から顔をあげた彼女の無表情が僕に突き刺さる。

じいっと僕の顔を真正面から見つめてくる彼女の顔に、「ああやっぱり可愛いな」と思ったり、心臓が破裂するほど鳴っているのを感じたりしていると、彼女が口を開いた。

「どうして？」

「ど、どうしてって、そりゃあ、つぼみのことが好きだからだよ」

「好き」

「そ、そう。好き。愛してる。ラブ」

「……………」

彼女は黙ってしまった。

これはいつものことだ。

彼女は考え事をする時みたいに、片手を顎にやって下を向いた。このポーズを僕は勝手にコナン君ポーズと呼んでいる。最大限に熟考しなければならない場面で彼女がとるポーズだった。逃げたい。

「いいよ」

逃げたい。

「え？」

「よろしくね」

つぼみはそれ以上会話をする必要性を認めなかったのか、読みかけだった本に視線を落として、すらすらと読

み始めた。

「え？」

僕の声だけが部室に響く。

顔が真っ赤。

手が震えている。

それはすべて僕の反応だ。

つぼみはいつものように無表情で本を読み続けた。

「え？」

\*

こうして僕は、つぼみと付き合うことになった。

夢ならさめないで欲しい。

ひゃっほおおいッ。

2

人生初めての彼女である。

いろいろな経験をした。

二人とも人混みが嫌いだったので、図書館で一緒に本を読んだり、公園を散歩したり、僕の家で一緒に映画を見たりした。

いろいろなことをした。

手を握ったし、手を握ったりした。右手ではなく左手でも手を握ったし、指を絡ませる感じで手を握った。ほかには手を握ったし、握ったりした。

手を握ることしかできなかった。

数ヶ月、手を握るくらいしか進展がなかった。

もちろん僕が握った彼女の手はとても柔らかくてすばりしかった。それだけで満足なんだけれども、僕も男だ。もっといろいろなことがしたい。手を握るだけではなくもっと進んだことがしたかった。僕は欲情していた。彼女の柔らかいような体に魅了されっぱなしだった。当然、セックスがしたいということを彼女に遠まわしに伝えたこともある。しかし、

「セックスって、子供をつくるためのものでしょ？」

これである。

つぼみは古風な考え方をもっていた。

カトリック系の小中高一貫の女子校に通っていたらしく、お堅いことこの上ない人格を形成されておられるようだった。僕がいくら誘っても「セックスって子供をつくるためのものでしょう」の一言で全てはご破算だ。それでも僕はめげなかった。僕は欲情していた。

「で、でもコンドームをつければ子供だってできないから、大丈夫だよ」

「なんでそんなものつけるの？ それだと子供ができないじゃない」

「そ、それはそうだけど」

「子供をつくるためにするセックスで、なんで子供をつくらないための行動をとるのか、いまいち私にはよく分からないんだけど」

いつもの無表情。

淡々と落ち着いた口調で言う彼女は、「セックスは子供をつくるためのもの」ということを堅く信じているようだった。

「で、でも、お互いに体を重ねてさ、愛を深めるっていうのかな。そのためにセックスすることだってあるんじゃない？」

僕はめげなかった。

しかしつぼみは、

「でもセックスって子供をつくるためのものだよね」

一言。

これである。

どうしたってこの大きな壁を突破することができなかった。それでも僕は諦められなかった。それだけ彼女に欲情していたのである。それで、

「え？ 手でやって欲しい？」

つぼみが珍しくその大きな瞳をまん丸に見開いて言った。

セックスがダメなら手でして欲しい。

僕は厚かましくもそう頼んでみたのだ。

「……………」

つぼみはいつものコナン君ポーズで黙った。

視線も下にやって熟考の構えだ。

僕は顔を真っ赤にして、ダラダラと汗をかきながら、つぼみの返事を待った。

「うん、いいよ」

「え？」



「だから、手でしてあげる。これはセックスじゃないから別にいいよ。それに、男の人って射精しないと辛いんだよね」

だからこれはボランティアみたいなものだよ。

つぼみはそう言って、いつものように無表情のまま僕のことを見つめてくるのだった。

\*

部屋の中。

パンツを脱いでベットに横たわる。

そのかたわらに正座したつぼみが、がしっという感じに僕の愚息を片手で掴んだ。

「分からないからやり方教えてね」

そんないつもの小さな声が聞こえる。

けれども僕はそれどころじゃなかった。

彼女の手の感触。

それだけに僕の全意識は集中してしまっていたのだ。

(き、きもちいいッ！)

やわらかかった。

あたたかかった。

きもちよかった。

自分で慰める時よりも何十倍も興奮した。

「どうすればいいの？」

僕の愚息を握ったまま彼女が質問してくる。

いつもの無表情で淡々と。

その変わらない様子で見下ろされているのだと思うと、なぜかとても興奮した。

「あ、あの、そのまま、上下にしごいて……」

「こう？」

つぼみの手が言葉どおりに動いた。

電撃が走った。

快感で体がビクンと震えた。

「あ、きもちよかった？」

「う、うん」

「こうするのね」

しこしこ。

彼女の手が僕の愚息をしごいていく。

そのたびに僕の体はビクンと震えた。

信じられないほどきもちよかった。

自分の手でやるのとは比べものにならないほどの快感。彼女の手が動くたびに、僕の愚息はピクピク震え、先走りの汁を漏らしていった。

「なにか出てきたよ？」

不思議そうにつぶやくつぼみ。

ねちゃねちゃと粘着質な音が部屋に響きわたる。

「き、きもちよくなると、出ちゃうんだよ」

「これが精液？」

「ち、違うンッ！ ち、違うよ。カウパーって言って、精子も含まれてるみたいなんだけど、でもンンッ！

きもちいい」

言葉も満足に喋れない。

その間も、つぼみはその柔らかい手を上下に動かしてしごき続けている。

彼女の無表情な顔が、じいっと僕のことを見下ろしている。僕が喘いでいる様子を淡々と見下ろして、僕の反応を観察しているのだ。

あまりの快感。

我慢できるはずもない。

僕はあっけなく射精した。

「い、いくうううッ！」

どっぴゅううううッ！

精液が飛び散る。盛大な射精。

大量の精液が僕の下半身を汚した。

人生で一番の射精だった。

目がチカチカして、ハアハアと息を荒くする。

「射精した？」

つぼみが淡々と聞いてきた。

初めて男の射精を見たはずなのに、彼女はまったく驚いた様子を見せなかった。いつもどおりの無表情でもって、淡々と僕のことを見下ろしている。僕は射精の衝撃でうまく喋れなかった。そんな僕にむかって、つぼみが言った。

「次はもっとうまくやれると思うよ」

「え？」

「やるね」

がしっと彼女の手が再び僕の愚息を握った。

それは有無を言わせない力強い動きだった。

僕の愚息はつぼみの手によってがっしりと握られ、その感触だけでビクンと震えるしかない。



「つ、つぼみ、ま、まっアアヒイイインッ！」

制止の言葉よりも早く彼女の手が炸裂した。

柔らかい手の平が僕の分身を蹂躪していく。

しかも、さきほどよりもその動きは洗練されていた。まるで熟練の娼婦のような手つきで、つぼみが僕の愚息をめちゃくちゃにしていく。

「こうだよね」

淡々とした声。

それとは対照的な情熱的な手コキ。

彼女の五本の指が肉棒にからみついて、的確な動作と力加減で責めてくる。

「ひいひいひいッ！」

「ここかな？」

「あ、ああああッ！」

「正解みたい。こっちもだね」

「アッヒイイイイッ！」

「うん、わかったかも」

動きが明らかに変わった。

まるで僕の弱点を全て熟知しているかのように、つぼみの手が僕の肉棒を虐殺していく。

鬼頭を包み込んでグリグリと回転させ、刺激で麻痺する瞬間に根本までいっきにしごいてくる。鈴口だけ人差し指でいじりながら、ほかの指で肉棒に繊細なタッチで触れてくる。

うまい。

きもちよすぎる。

僕は言葉も喋ることができず、アヒアヒと喘ぎ声を出すことしかできなかった。

「ここだね」

そんな僕の喘ぎ声と反応だけで、つぼみは僕の弱点を次々とみつけてしまうのだった。

僕も知らなかった自分の弱点を、つぼみによって思い知らされる。裏筋をいじられるのがこんなにきもちいいなんて初めて知った。鬼頭をいじられるのだってこんな腰を抜かすほどきもちがよかったなんて知らなかった。

僕はつぼみに指示を出していない。

彼女は僕の反応だけで男を悶絶させる手コキを修得してしまっただの。

「ん、イキそうだね」

彼女が言った。

もう射精のタイミングすら把握されている。

「はい、射精」

どっぴゅうううううッ！

ビュッビュウウウッ！

彼女の言葉にあわせるようにして、僕は射精した。

まるで、射精の権利すら彼女に奪われてしまったかのような錯覚。射精が終わらない。どこまでも続く精液お漏らし。僕は自分の腰から先がなくなってしまったかのような感覚に悶えながら、アヒアヒと喘ぐしかなかった。

「きもちよかった？」

ようやく射精が終わったタイミングでつぼみが聞いて

きた。

無表情な彼女が僕のことを見下ろしている。僕はハアハアと肩で息をしながら、なんとか言葉を絞り出した。

「は、はい。き、きもちよかったです」

「なんで敬語なの？」

「い、いや、だ、だって」

「そんなにきもちよかった？」

「……はい」

僕は気圧されたように言った。

彼女にはもう逆らえない。そんな気がした。

「そう、よかった」

彼女は無表情のまま、

「こんなのでよければ、またしてあげるよ」

「い、いいの？」

「うん。だって簡単なもの」

「え？」

「男の子って簡単に射精しちゃうんだね。こんなに簡単だったら特に面倒でもないから、いつでもやってあげるよ」

つぼみは僕のことを見下ろして、

「射精したくなったらいつでも言ってね」

いつもの無表情で、そう言うのだった。

### 3

それからというもの、僕はますますつぼみにのめり込



んでいった。

二人きりになれば常に手コキをお願いした。

我慢なんてできなかった。

彼女の近くにいるだけで僕の愚息は期待に勃起してしまうのだ。それだけつぼみの手コキはすさまじかった。自分で慰める時より何百倍もきもちがよかった。それを毎日のように味わってしまえば、手コキ中毒になってしまっても仕方がないだろう。

「あっひいいいいッ！」

今日も僕はつぼみに絞られる。

僕の部屋。そのベットであおむけになって寝ころび、僕はつぼみに手コキをされていた。

「あ、ああああ……っひ……ッッアアアンッ！」

声が我慢できない。

我慢しようと思ったそばから喘いでいる。

その原因はすべてつぼみにあった。

「きもちい？」

いつもの無表情。

その顔で見下ろされながら、僕は責められ続けている。

つぼみは普段と変わらない様子に見える。しかし、彼女の手は熟練の手つきで男の一物をしごいているのだ。その動きは男の一物を手玉にとる娼婦よりも手慣れたものになっていた。

(おかしいいいッ！ きもちよすぎるううッ！)

僕は心の中で絶叫していた。

つぼみの手コキは、どんどんうまくなっていた。

昨日より今日のほうがうまい。

信じられないことに毎日のように技量があがり続けている。

彼女は僕の喘ぎ声と体の痙攣からさらなる快感の与え方を学び、それを実践していくのだ。

もはや僕の愚息は彼女のものだった。

つぼみに支配されてしまっている。

僕は早くも息も絶え絶えになって喘ぐだけになってしまっていた。

「乳首も責めるね」

「ま、まっアッヒインンッ！」

彼女の片手が僕の乳首をつまんだ。

上着をまくりあげて、その小さな男の乳首を蹂躪していく。カリカリといやらしく動く指先によって、僕は早くも追いつめられてしまった。

「い、いっきゅううううッ！」

どっぴゅううううッ！

びゅっびゅううううッ！

頭がスパークする。

下半身が溶けて爆発している。

その間もつぼみの手コキはやまない。乳首への刺激も継続されて、僕は踊り狂ったように体をバウンドさせるしかなかった。そうしていなければ、あまりの快感で頭がおかしくなる。愚息から子種が強制的に吐き出されていった。

「ん、いったね」

ようやく手を止めたつぼみが言った。

彼女は「かひゅ——かひゅ——」とか細い声しかあげることができなくなった僕のことを見下ろし始める。

じっと、淡々と、無表情で。

射精後のルーティンワークになったこの時間。

僕は射精の余韻でめろめろになりながら、無防備な姿をいつまでも彼女に見下ろされ続けるのだった。

「乳首責めるとすぐ射精するね」

ようやく僕の意識が正常に戻ったのを見計らってつぼみが言った。

「そんなにきもちよかった？」

「す、すごいです。ほんと、すごい。きもちよすぎて……すごい」

「そう？」

「な、なんでこんなうまいの？ お、おかしいよ。だって、今まで付き合った男の人、いなかったんだよね？」

「そうだよ」

「なのになんでこんな手慣れてるの？ つぼみはセックスだってしたことないんでしょ？ 初めてで、こんな、すごい、こんな」

うわ言のようにつぶやく。

つぼみはじっと僕のことを見下ろしながら、

「簡単だよ。こんなの」

「え？」

「男の子を射精させるのなんて簡単だってこと。セック

スの経験がなくたって、余裕でイかせられるよ」

こんなふうに。

がしっとなつぼみの手が僕の愚息を捕獲した。その感触だけでピクンと僕の体が跳ねた。

「ま、待ってつぼみ！ イったばかりだから、今、だめえええッ！」

「……………」

「あ、あ、あ、あ、む、無言でしこらないで。そ、そんな見つめちゃ嫌だあああッ！」

「……………」

「アッヒイイイイイッ！」

つぼみの蹂躪は終わらない。

彼女はじいっと僕のことを無表情で見下ろしながら、永遠と手コキをやめなかった。敏感になった鬼頭を手のひらで包んでグリグリと虐殺していく。さらに喘いで涙がもれる。そんな情けない様子を頭上からつぼみが見下ろしてくる。さらにトドメとばかりに、彼女の唇が僕の乳首をくわえこんで、舐めあげた。

「いきましゅううううッ！」

どっぴゅううううッ！

どっどっぴゅうううッ！

二発目。

間髪いれずの射精に僕の意識がブラックアウトする。信じられない量の精液が爆発していく。それなのに、つぼみの手コキは止まらない。乳首を舐める彼女の舌もますます過激に蠢いていく。

「あっっひいいい！ やめ、やめへええええッ！」

顔を左右に振って必死の懇願。

顔をブンブン振り回して一生懸命にお願いしているのに、つぼみはそれでも手コキと乳首責めをやめてくれなかった。

「……………」

無言。

無表情。

じいっとこちらを見下ろしてくる彼女の顔。

僕が涙と涎をまき散らしながら痴態の限りを尽くしている様子を、上から淡々と見下ろしている。ついに意識が失われる瞬間——彼女の口元が、うっすらと微笑むのが見えた気がした。

#### 4

僕は手コキ中毒になった。

つぼみと一緒にいる時はもちろんのこと、彼女と離れているときだって、彼女の手コキのきもちよさを思い出して悶々とした。

中毒といったら手コキだけではない。

僕はつぼみ中毒にもなっていたのだろう。

精神的に依存していた。

もう彼女がいなくなったら死ぬしかないのではないかと思うほど、僕はつぼみにはまりこんでしまっていたのだ。それは、手コキをされるごとに深まった。

泥沼に沈むように僕はつぼみに依存していった。

「……………」

部室。

ボランティア部の部室だ。

今日はほかの部員もおらず、僕とつぼみの二人きりだった。長テーブルにパイプ椅子がおかれているだけの簡素な部屋。僕たちは窓際の椅子に座っていた。

「……………」

つぼみは無言で本を読んでいる。

彼女が好きな作家が新作を出したとかで、僕からしてみれば見る気も失せるような分厚い小説を、つぼみはいつもの無表情で熱心に読んでいた。

僕はそんな彼女の横顔をぼんやりと見つめていた。

夢心地。

おそらく熱に浮かされたようなトロンとしたまなざしを彼女に向けていることだろう。その自覚はあった。けれど、自覚があったからといってどうなるものでもない。

まるっきし恋する乙女だ。

僕は彼女の隣にただで頭がぼんやりして、幸福すぎるほどに幸福だった。

(つぼみの手、綺麗だ)

本をめくる時の優雅な彼女の手つき。

長い指と、ふっくらと柔らかそうな指。

その手を見るだけで僕は手コキを思い出す。

目の前で本のページをめくっている指は、僕のことを

簡単に射精させてしまう魔性の指なのだ。あれに絡みつかれたら最後、徹底的に射精させられる。意識がなくなるほどの射精地獄に男を叩き落としてしまう美しい指――。

そんな彼女の指を見つめていると、僕の愚息がむくくと屹立するのを感じた。

勃起してしまったのだ。

彼女の手を見つめているだけで勃起してしまった。

僕は恥ずかしいやら決まりが悪いやらで、なんとか彼女の手から視線をはずそうとした。その時、つぼみがパタンと本を閉じて言った。

「勃起したね」

「え？」

「勃起してるでしょ、今」

どくと心臓が脈打つ。

「ど、どうして、なんでわかったの？」

「そんなの分かるよ。男の子が勃起すると、なんだか情けない雰囲気になるんだもん。その空気みたいなものが伝わってくるの」

「そ、そうなのか」

「うん。それで、どうする？」

じっと無表情な彼女の視線が僕に突き刺さる。

「する？」

「え？」

「手コキ。どうする？」

つぼみが片手を輪っかにして僕の眼前に展示した。

そのまましこしこと上下に動かす。

その動き。

あのきもちよさを知ってしまった僕は、顔を真っ赤にしてコクンとうなずくしかなかった。

\*

裸になって。

つぼみはそう言った。

僕は言葉の意味が理解できなかった。

ここは部室なのだ。

いつ誰が入ってくるか分からない。

全裸になるなんてできるわけがなかった。

「裸にならないとしてあげないよ？」

「そ、そんな」

「はやく裸になって」

有無を言わせない言葉。

僕は射精の期待に逆らえなかった。

一枚一枚、服を脱ぐ。

彼女の前で自分から衣服を脱いでいく。

その様子をつぼみはじいっと見つめていた。

まるで支配者の視線だ。

僕はそれにさらされてますます勃起した。

ハアハアと息を荒くしながら僕は全裸になった。

「うん。じゃあ、隣に座って」

服を着ているつぼみが言う。



僕は言われたとおりに彼女の左隣に座った。

つぼみは服を着ているのに僕だけが全裸。

それが僕とつぼみの新しい関係性をあらわしているように思えてならなかった。

「読んでいる本がいいところだから、今日は本を読みながらするね」

彼女が机に本を開いた。

そのまま本に視線を落とす。

なんのことか分からない僕が困惑していると、彼女の左手が伸びてきて、僕の愚息をがっしりと掴んだ。

「むうううッ！」

つかまれただけで電流が走る。

つぼみの美しい指が僕の肉棒にからみつき、そして上下に動き出した。

「ああああああッ！」

声もれる。

とんでもなくきもちい。

昨日より明らかにうまくなってる。

僕の弱点を的確に突きながら僕が一番感じる力加減で始まる手コキ。僕は声を我慢することもできずに、喘ぐしかなかった。

「……………」

そんな超絶技巧の手コキをしているというのに、つぼみは僕のほうをまったく見ていなかった。

彼女の視線は、テーブルに置かれた本に向けられている。

彼女の意識のほとんどだって、その本に向けられていることは、その真剣そうな瞳を見るだけで分かった。

ながら手コキ。

つぼみは本を読みながら僕に手コキしているのだ。

「……………」

無言。

こちらをチラッと見つめることすらしない。

つぼみは集中して本を読んでいて、時々、本のページをめくる音が聞こえる。

そんな適当な手コキなのに、僕の一物に与えられる快感は規格外すぎた。

「あ……あひ——あん——」

声もれる。

僕の口から抑えることのできない喘ぎ声もれていた。そんな僕に反応することなく、つぼみは本を読み続けている。その左手だけが、僕の一物を責めるために躍動していく。

「ひい……ンンッ……あああ——」

「……………」

「んふうあ……アアン……」

「……………」

「ああん……ッ……んほ……」

「……………」

喘ぎ声と無言。

全裸の男と服を着た女

興奮した僕と静かに本を読んでいる彼女。

どちらが御主人様なのか。

どちらがペットなのか。

そんなことが一目瞭然に分かってしまう光景が、部屋に展開されていた。

(ああ……こ、こんな……屈辱的なはずなのに……きもちよすぎるうう)

僕の限界は近かった。

その瞬間、本をめくっていたつぼみの右手が動き、テーブルの上のティッシュに手を伸ばした。シュッシュと何枚か抜き出し、そのまま僕の鬼頭にかぶせる。その後、明らかに動きを変えたつぼみの左手が、僕の一物に襲いかかった。

「ひっぎいいいッ！」

どっぴゅうううううッ！

びゅっぴゅうううッ！

あっけない射精。

我慢できるはずもなく、絞り出されるように射精する。僕の精液はそのまま、つぼみにかぶせてもらったティッシュに放出された。

「はあ、はあはあ」

息も絶え絶えになった僕は椅子にもたれかかって呆然とするしかなかった。

その間につぼみが本を読みながら手早く精液まみれになったティッシュを丸めて、そのままテーブルの上に置いた。

敗北の証。

あっけなく射精した結果が、僕の目の前にさらされる。

しかもそれで終わりではなかった。

「ひいいいいッ！」

つぼみの左手が再び僕の一物をがしっと捕獲する。

それだけでフル勃起になった僕の愚息を握りしめて、またしてもながら手コキが始まった。

「つ、つぼみ、も、もういったから、いったから」

「……………」

「や、やめ……だ、だめええ……もうイきましたからあああ」

僕が射精したことなんて彼女も知っている。

僕の射精をティッシュで処理したのは彼女なのだ。

それなのに、つぼみは再び手コキを始めてしまった。視線は変わらず本に落とされ、こちらのことを一瞥すらせず、その左手だけが愚息を蹂躪する。

「ひひいいいいッ！ ああああッ！」

もう声を我慢することなんてできなかった。

さきほどよりも強い手つきで彼女の左手が躍動している。もっと精液を搾り取る。左手はそう決意しているように見えた。射精したばかりで敏感な鬼頭を手の平で包んでグリグリと蹂躪したり、精液をローション代わりにして強烈なピストンを繰り返す。

つぼみは本を読んだままだ。

彼女の左手だけが意思をもった別の生物のように動き続けていた。

(だめええ……もうイクううう)

あまりにも強烈な手コキ。

僕は二回目だということにもう射精しそうになった。

あと一瞬、

ほんの少し一物に刺激が加わったら射精する——。

その瞬間、つぼみの手が僕の愚息から離れた。

「え？」

射精する感覚が遠のいていく。

僕は訳も分からずつぼみの横顔を見るだけ。

彼女は変わらずに本を読み続けていた。

「つ、つぼみッヒイイインン！」

彼女の左手が再び僕の愚息をがしっと掴んだ。

またしても手コキが始まる。

けれども射精の兆候はなくなっていて一からやり直しだった。僕の一物には再び強烈な手コキが施されていく。

寸止めだ。

つぼみは本を読みながらの手コキで、僕の射精の瞬間を完全に把握し、寸止めをしたのだ。

支配されている。

僕の射精は彼女に支配されているのだ。

彼女はそのまま、僕のことを寸止めし続けて射精をさせないこともできるし、一瞬にして精巣が空っぽになるくらいの圧倒的な射精に追い込むことだってできる。

「つぼみいい」

その横顔に僕は懇願する。

自分で聞いていても情けなくなるような負け犬の声で、僕は彼女の名前を呼んで射精をねだる。

「……………」

しかし、彼女は無表情のまま本を読むだけだった。

僕に意識を向けることもなく、まるで無反応に本を読むだけ。それなのに、彼女の左手は一個の生命体みたいに縦横無尽に僕の愚息をなぶってきていた。

「ひひひひひッ」

しこるスピードがあがった。

体がガクガクと震える。

イク。

その瞬間、つぼみがティッシュ箱に手を伸ばし、シュッシュとティッシュを何枚も手にとって、再び僕の鬼頭にかぶせた。そして、

ぎゅうううううッ！

「あっはあああんんん！」

どっぴゅううううう！

ビュッビュウウ！

射精。

つぼみの手がひときわ強く僕の一物を握りしめると、すぐに僕は射精した。まるでゴムチューブの中身を絞り出すかのような強烈な手コキが炸裂し、下半身がなくなってしまうかのような射精がずっと続く。

「……………」

その間もつぼみは本を読むだけだった。

僕が「アヒアヒ」言いながらビクンビクンと体を震わせて射精をしているのに、こちらの方を振り向くこともなかった。

(す、すごかった)

ようやく射精が終わる。

つぼみは手早くティッシュを丸めると、僕の目の前のテーブルにそれを陳列した。

僕の敗北の証。

精液まみれのティッシュのかたまりが、僕の目の前に二つ並んでいる。

僕は背筋が凍った。彼女がやろうとしていることがその時はじめて分かったからだ。

「ひiiiiiiiiiiッ！」

再び、彼女の魔性の手が僕の愚息を捕獲する。

その手に握られただけで、僕は逃げられない。

永遠に寸止めされ、永遠に射精させられる。

僕はその後、何度も寸止めと射精を繰り返され、精液の全てを彼女に搾り取られてしまった。最後にはテーブルの上に10個以上のティッシュが並ぶことになった。

## 5

僕は、つぼみにはまってしまった。

もう逃げられない。

つぼみと離れているときですら、つぼみのことばかり

考えていた。彼女は変わらずに無口で無表情だったから、周囲からは僕だけが熱をあげているように見えただろう。

(でも、僕ばかりいいんだろうか)

きもちよくなっているのは僕だけなのだ。

僕は手コキをしてもらってきもちよくなっているのに、僕は彼女に何もしてあげられなかった

自分だけきもちよくしてもらうことに罪悪感みたいなものも感じていた。

僕だけではなくつぼみにも感じて欲しい。

セックスができないのだとしても、つぼみがしてくれるように、僕も手で彼女のことをきもちよくさせてあげたかった。僕は、意を決して、彼女にその思いを口にした。すると、

「別に私はいいいよ」

つぼみは読んでいた本から顔をあげることもなく言った。

場所はいつもの僕の部屋。

そこで顔を真っ赤にした僕が、ポーカーフェイスのつぼみに「よかったら、僕も手でつぼみのことをきもちよくさせてあげたい」と伝えたのだ。

「な、なんで？ き、きもちよくなりたくないの？」

「ん？」

そこでようやく彼女は顔をあげた。

いつもの無表情が僕の焦ったような顔をじっと見つめてくる。僕は、ますます狼狽してしまった。



「だって、いつも僕だけきもちよくしてもらって、なんだか悪いよ」

「……………」

「僕だけきもちよくなることに罪悪感も感じるんだ。だから、つぼみにも、ちゃんと、きもちよくなってもらいたい」

つぼみはじっと黙って僕の顔を見つめてきた。

何かを考えているのだろう。

コナン君ポーズはとらなかったけど、長いつきあいで、彼女が熟考しているかどうかはその雰囲気で見分かるようになっていた。

「別に本当に大丈夫だよ」

なんの気負いもなく彼女は言った。

「わたし、やっぱり性的なことって子供をつくるためにするものだと思うの。だから、そういうのは本当に大丈夫」

「で、でも」

「それに何か勘違いしてるようだけど」

彼女はじっと僕のことを見つめながら、

「私も楽しんでるんだよ」

「え？」

「君のこと射精させること、楽しんでるの」

どくん。

僕の心臓が脈打った。

彼女はいつもどおりの無表情だった。

けれど少しだけ頬が赤く見えた。

性的なことに抵抗感を覚えているはずの生娘が、僕のことを射精させることを楽しんでいるのだという。そのことがどこか背德的に感じられて、僕は盛大に勃起してしまった。

「ん」

彼女が僕の股間を見下ろす。

勃起した瞬間を彼女が見逃すはずがない。僕の下半身はもうつぼみの支配下にあるのだ。そう思うとますます僕の愚息はバキバキに勃起した。

「そうだ」

つぼみが何かを思いついたように言った。

「さっき君、自分だけきもちよくなるのに罪悪感を感じてるって言ったよね」

「う、うん」

「それじゃあ、私のこときもちよくしてくれる代わりに、私のお願い聞いてくれる？」

「お願い？」

そう。

彼女はつぶやき、無表情で言った。

「徹底的に君のこと寸止めしてみたい」

\*

断ることはできなかった。

これは彼女の希望なのだ。

僕は真っ赤な顔をしてコクンと頷いた。頷いてしまったのだ。これがおそらく僕が引き返すことができた最後の分かれ道だったのだろう。僕は、なんの比喩もなく、つぼみなしでは生きていけなくなる道を選んでしまった。

「ひiiiiiiiiiiiッ！」

男の悲鳴。

それは僕の悲鳴だった。

僕は全裸になり、自分の部屋の床で四つん這いになっていた。そんな僕の尻のほうから、彼女の手が伸びている。僕はまるで乳搾りをされる牛のように、つぼみに手コキをされていた。

「おねがiiiiiiiッ！ つぼみiiiiiiiッ！ もう、もうイかしえてえええええッ！」

僕は半狂乱になって叫んだ。

つぼみは宣言どおり決して僕のことを射精させることはなかった。

今も彼女の右手が僕の愚息にふれるかふれないかの微妙なフェザータッチで、永遠と肉棒をなでていた。彼女の左手は僕の玉をコロコロと転がし続けている。

その刺激はとんでもなくきもちがよいものだった。けれど射精するには足りない。僕は長い時間、生殺し状態のままで、永遠と焦らされていた。

「……………」

つぼみは無言だ。

ただただ熱心に僕の肉棒に快感を送り込んでいる。一言も発さず、集中して僕の愚息をいじめ抜いている彼女。僕の口から射精懇願の命乞いが続いても、つぼみは一切それに反応せず、ひたすらに僕の愚息を虐めるだけだった。

「おかしくなるうううッ！ もうおがじぐなっじゃうからああッ！ もう許してくだじゃいいいいいいッ！」

僕は涙を流して絶叫していた。

それだけつぼみの寸止め地獄は残酷だった。

いつまでたっても射精直前の快感だけを送られ続ける。もう少しで射精できそうというところで手コキが緩やかになり、ぜったいに射精をさせてもらえない。その生き地獄に僕の精神は瓦解寸前だった。

「ひいいいいッ！」

いきなりフェザータッチが強烈な手コキになった。

四つん這いになった僕の乳搾りをするために、容赦のない刺激が僕の愚息に加えられる。

限界までじらされていた僕はその刺激だけで射精しそうになる。

目の前がチカチカしてやっと射精ができる——その瞬間、つぼみの手がパッと離れた。

「しょ、しょんなああああッ！」

イけない。

あと1秒。

あと1秒彼女の手が僕の肉棒にふれていたら絶対に射

精した。その瞬間におあずけをくろうことによるダメージはひどすぎるものだった。僕は両手で自分を支えることもできず、頭から地面に倒れこみ、その寸止めの地獄に悶えるしかなかった。肉棒もご主人様に媚びへつらうように、上下にぶるんぶるん揺れて、さわってくださいいittoと自己主張をしていた。

「……………」

けれどつぼみは無言だ。

僕は地面に突っ伏したまま背後に視線だけをやる。

いつもの無表情で僕の痴態をじっと観察しているつぼみが視界に入る。その普段と変わらない様子の彼女と、全裸になって四つん這いになっている自分との対比で、ますます僕は興奮してしまった。

「……………」

彼女が無言で僕の愚息に顔を近づける。

寸止めの余韻で苦しんでいる僕にむかって、これまで何度も繰り返されてきた追い打ちをしようとしているのだ。僕が待ってと懇願するよりも前に、彼女が僕の愚息に息を吹きかけた。

「ふううううう」

「ひiiiiiiiiiiiiッ！」

彼女の吐息が残酷な快樂拷問具となる。

微弱な刺激。竿や玉に加えられる吐息くらいでは普通だったら快感を覚えることだって難しいはずだ。

しかし、今は違う。

何度も射精直前の寸止めをされたこの瞬間、吐息の刺

激はいくこともできない絶妙な生殺しの責めが変わる。

「ふうううううう」

「あ、や、やめてえええ」

僕の体がガクガクと震える。

肉棒も媚びるように、もっと刺激をくださいと射精を懇願して犬のしっぽのように揺れている。あと少しの刺激が加わるだけで射精できる。そんな状態で吐息だけでもどかしい刺激を加えられると、頭がどうにかなってしまいそうだった。

「ふうううううう」

やめてくれない。

じわじわと吐息だけで僕の愚息の快感がコントロールされていく。僕はいつまでも続く射精禁止地獄に、我慢ができなくなっていった。

(も、もう無理。しゃ、射精したい)

頭の中はその一念だけ。

それ以外のことは考えられない。

つぼみのきもちなんて考えることなく、僕は射精をさせてもらうためだけに四つん這いの格好を止め、起きあがってしまった。

「お、お願い。もう、もう射精させてください」

正座。

ハアハアと肩で息をして、目の前の彼女に必死のお願いをする。

「……………」

つぼみは無言だ。

じっと僕のことを見つめている。

いつもの無表情。しかし、長年のつき合いのある僕は、彼女が怒っていることに気づいた。

「つ、つぼみ？」

「……………」

「お、おこってるの？」

「……………」

「ね、ねえッヒイイインッ！」

いきなり押し倒された。

あおむけに転がる。

その上に覆い被さるようにして、彼女が僕に襲いかかってきた。

「つ、つぼアッハンンッ！」

乳首を摘まれた。

ビクンと体が震える。

同時に愚息ががしっと捕獲され、手コキが再開される。容赦のない手つき。まるでおまえの精液を絞り出してやると宣言するかのような乱暴な勢いで、僕の愚息を責めなぶっていく。

「だ、だめええええッ！」

「……………」

そんな強烈な手コキと乳首責めをしているというのに、つぼみはあくまでも無言だった。無表情のまま僕を見下ろして、容赦なく責めてくる。

「あ、アヒ、も、もう無理」

すぐに僕はイきそうになった。

下半身が爆発する寸前。

その瞬間をつぼみが見逃すはずがない。

「……………」

無言のまま彼女の手が離れる。

またしても寸止め。

けれどもそれで終わりではなかった。

彼女はそのまま僕の両乳首を搾り取るようにいじってきた。

「ひひひひひひひッ！」

悲鳴が部屋中に響く。

快感が継続する。

射精の兆候がやまない。

彼女の指がカリカリと妖艶に僕の乳首をいじり続ける。一物には一切の刺激を与えることなく、永遠と僕の乳首に致命的な快感を送り込んでくる。何かが僕の股間を濡らした。

「ん、漏れたね」

つぼみの声。

僕は訳が分からず「え？」と口にした。

「ほら、精液漏れてるでしょ」

つぼみが僕の下半身を指さした。

そこには、ぼたぼたと白い液体を弱々しく漏らしている僕の愚息があった。

「な、なんで」

訳が分からなかった。

僕は射精していないはずだ。



つぼみに射精させられる時のきもちよさはなにもなかった。それなのに、なぜ僕の愚息から精液だけが漏れていくのか。

「ぜんぜんきもちよくないでしょ」

つぼみが無表情で僕を見下ろしながら言った。

「射精ぎりぎりです止めて、乳首だけに刺激を与えていくと、射精できずに精液だけ漏れるんだってさ。インターネットに書いてあった」

「あ、あああッ」

「これやると、射精のきもちよさをぜんぜん感じないまま精液だけ漏らしちゃうんだって。ほら、今もポタポタ漏れてる」

言われたとおりであった。

僕の一物から白い液体がポタポタ漏れていく。

しかし、快感はなにも感じなかった。

ただただ、自分のものとは思えない愚息から、精液だけが漏れていく。

「これ、つらいでしょ」

彼女が凄みを感じさせる無表情で、

「せっかく我慢したのに、きもちよさ0の射精ですべてはご破算。きもちよくななくても射精は射精だからね。あんなに我慢したのに、君の射精はこれでおしまいだよ」

「そ、そんなあああッ」

「寸止めを我慢できなかった君が悪いよ。私の好きにしてもいいって言ったのに、私の言うこと聞けなかったんだもん」

だから、これはお仕置き。

彼女はそう言って、精液お漏らしが終わった僕の愚息にデコピンをした。もはや子供ち●ぽになってしまった僕の分身は、その衝撃でぷるぷると震えるだけだった。

お仕置き。

彼女の言葉。

僕の心臓はドクンドクンと脈打っていた。

ぷるぷると震える体。

僕はつぼみにすがりついた。

「しゃ、射精させて」

「ん？」

「しゃ、射精させてください。こんなのやだあ。お願いです。ちゃんと、ちゃんと射精させてください」

「……………」

「なんでもしますからああ。なんでも言うこと聞きますから、だから射精させてくたしゃいいいいッ！」

自分の彼女の心の底から哀願する。

射精させてくださいと。

お願いですからちゃんと射精させてくださいと。

必死にお願いする。

「……………」

つぼみは無言だ。

無表情のまま僕の痴態を観察している。

なぜか、その頬が若干赤らんで見えた。

「なんでも言うこと聞くのね？」

静かに。

子供に言い聞かせるみたいにつぼみが言う。

「なんでも言うこと聞くんだね？」

「ひ、ひいいいッ！」

「どうなの？ ん？」

あくまでも無表情での言葉。

その迫力に僕は頷いてしまった。

「はひいいいッ！ なんでも言うこと聞きますうううううッ！」

その瞬間。

つぼみが、うっすらと笑った気がした。

「じゃあ、今日はもう一度寸止めするね」

彼女の手が僕の愚息を握り支配する。

その時にはもう、彼女はいつもの無表情に戻っていた。

「限界まで寸止めを繰り返す。わかった？」

「あ、あああああッ！」

「最後にはイかせてあげるから、がんばってね」

彼女の手コキが再開する。

ぜったいに射精できない手コキ。

彼女に支配されている僕は、射精1秒前で寸止めを繰り返され、バカになっていった。もう、つぼみには逆らえない。そう思った。

6

絶対服従。

つぼみの言うことをなんでも聞く。

そんな約束をしてしまった後、僕は立ち上がることもできなくなるほど寸止めをされ、空っぽになるまで絞りとられた。僕はもう彼女に逆らうことができなくなってしまった。だから、つぼみから新たな命令をされた時も、僕はおとなしく従うしかなかったのだ。

「て、貞操帯？」

彼女に手渡されたもの。

それは金属製の貞操帯だった。

僕の愚息にはめこむためのもの。

それを手渡して、彼女は言ったのだ。

「これから君のこと射精管理するね」

いつもの無表情。

その普段と変わらない様子で当然のように「射精管理」とつぶやく彼女に、僕はたまらない恐怖を感じた。

「な、なんで」

「ん？」

「しゃ、射精管理なんて、どうしてだよ」

つぼみはじいっと僕のことを見つめた。

「だって我慢できないでしょ」

「え？」

「私、これから君のこと寸止めさせ続けるつもりだよ？

射精させることなくずっと寸止めする。そんなことされて、貞操帯なしで君が我慢できるはずないじゃない」

「あ、あああッ」

彼女は本気だ。

それが僕には分かった。

つぼみの地獄のような寸止め。

極上の手コキから繰り出される寸止め地獄。

それを今後、永遠と僕に施そうと言うのだ。

「つけて」

「つ、つぼみ」

「はやく」

「うううッ」

「は・や・く」

「ひiiiiii」

彼女が無言ですごむ。

それだけで僕は全裸になった。

恥も外聞もなく全裸になって、バグギバキに勃起した愚息を彼女に捧げる。しかし、勃起した状態で貞操帯をつけることなんてできなかった。

「仕方ない」

つぼみが「ふう」とため息をついて、

「今日だけだよ？」

「アッヒイイインッ！」

彼女の魔性の手が僕の愚息をがしっと拘束する。

その手に捕らえられただけで、僕の腰は快感のあまり溶けてしまった。そのまま、彼女の地獄のような手コキがスタートし、終わった。

「ひiiiiiiiiッ！」

どっぴゅうううッ！

びゅっぴゅううう！

あっという間の射精。

10秒ももたずに射精が始まり、それが終わらない。僕は訳も分からず絶叫していた。

「な、なんでえええッ！　なんでこんなはやくううううッ！」

僕の愚息から精液が爆発している。

その間もつぼみの手が高速で僕の愚息をしこり続けていた。その快感。それは今まで味わってきた手コキよりも強烈で、僕の射精は止まらなくなった。

「今日はすぐに射精させる」

つぼみが無表情で言う。

「あっという間に空っぽにしてあげるからね」

彼女は僕の愚息を完全に攻略しているのだ。

支配されている。僕という存在はつぼみによって支配されていた。僕はあっという間に精液をすべて搾り取られてしまった。腰が抜けてしまい、地面に倒れ込んで、その赤ん坊みたいになった愚息を彼女にさらす。

「つけるね」

アヒアヒ喘ぐ僕にむかって彼女が言う。

手慣れた手つきでつぼみが貞操帯を僕の愚息に装着した。ガチャンと鍵がかかる音がする。それで、僕の全ては物理的にも支配されてしまった。

「これで君は勃起もできないよ」

つぼみが無表情で、

「君の射精の権利は、今後、わたしが管理するからね」

彼女が僕の眼前に鍵を見せつけてくる。

僕の愚息は勃起することもできなくなり、射精の権利も奪われてしまったのだ。

その支配者は誰か。

僕の男性としての権利を奪い支配しているのは誰か。

貞操帯の鍵を見せつけてくる彼女を見上げていると、そのことが嫌でも脳髓に刻み込まれた。

「明日から寸止めだよ」

彼女が無表情で言う。

僕の御主人様が淡々と宣言した。

「ぜったい射精させないから覚悟してね」

## 7

射精管理が始まった。

管理されているのは僕だ。

管理しているのはつぼみだった。

僕は彼女から徹底的に射精管理をされて、絶対にイかせてもらえず、永遠と寸止め調教をされた。

「あああッ！」

いつもの僕の部屋。

そこで四つん這いにされて、一物を握られている。

寸止め調教の時だけ、つぼみは貞操帯をはずしてくれた。それがはずされた途端にギンギンに勃起した僕の愚息を、彼女はがしっと握りしめる。

「……………」

握りしめて、それだけ。

彼女の片手が僕の急所をわし掴みにしている。

それだけなのに、僕の性感はどこまでも高まっていった。

「つ、つぼみいいッ！」

自分の意思とは無関係に、僕の腰がふりふりと左右に揺れる。

こびるように。御主人様に射精を懇願するように揺れ、少しでも一物に与えられる刺激が増えるように浅ましい懇願をしている。

「……………」

バッチインンンッ！

「ひいいいいッ」

それを叱責するかのよう、つぼみの手が僕の尻を叩いた。

お尻ペンペン。

聞き分けの悪い子供を躰るための行動。

彼女はそれを無言のうちで行い、僕の腰振りを強制的に止めさせると、またしても僕の愚息をわし掴みにした。

「あ……アアアッ——ああん」

微弱なそれでいて確実な快感。

彼女の手握りしめられているだけで、僕はどこまでもきもちよくなっていった。彼女の手の暖かさ。それに包まれている安心感と射精への焦燥感。そんなもので僕の頭はめちゃくちゃになっていく。

「ふうううううッ！」



「ひiiiiiiiiッ！」

彼女の吐息がとどめをさすように僕の愚息に吹きかけられる。

その微弱な刺激がさらなる興奮をよび、僕の体がガクガクと震える。

それでもイけない。

射精するにはあとほんの少し刺激が足りない。

その生殺し状態。

射精する直前の状態に永遠に留められてしまうという屈辱と地獄。僕は耐えることもできず、体勢を崩してしまった。前のめりになり、まるで土下座しているみたいに額を地面に押しつける。

「……………」

そんな状態になっても、つぼみの寸止め調教は止まない。ずっと続いていく。僕はあえぎ声をもらすだけの人形に変わり、永遠と彼女の手によって犯され続けた。

\*

寸止め調教は毎日続く。

彼女と一緒にいる時の僕は常に全裸で、常に彼女の魔性の手によって責められていた。

愚息を直接虐められるだけではない。

この日は徹底的に乳首責めをされた。

「お、お願い。ち●ぽ、ち●ぽさわってえええ」

浅ましいおねだりを繰り返す。

大の大人が射精を懇願して甘ったるい声で叫びちらかす。

「……………」

僕の懇願むなしく、つぼみは絶対に一物にふれようとしなかった。それどころか、この日は貞操帯もはずしてくれなかったのだ。僕の愚息は金属の拘束具によって閉じこめられたままだった。

「ア、アアアンッ！　ち、乳首らめえええッ！」

その状態のままで乳首責め。

僕はいつものように全裸でベットに腰かけて座っていた。その背後から僕のことを抱きしめ永遠と乳首責めをしているのがつぼみだった。

「……………」

無言。

僕の痴態には反応することなく、彼女は僕の胸板に魔性の手を這わせ、さわさわと愛撫を繰り返す。突起をいじられていないのに、それだけで頭がぼんやりとしてくる愛撫。それがしばらくの間続くと、彼女の人差し指が、勢いよく僕の両乳首に襲いかかった。

カリカリカリッ！

「ひいいいいいッ！」

右手人差し指が右乳首を。

左手人差し指が左乳首を。

それぞれ容赦なくカリカリと責める。その指使いはいやらしいの一言で、見ているだけで興奮するものだった。

「アヒインッ！ あ、あああん……ひっぎいいい……」

悶える。

容赦のないカリカリ攻撃は止まない。

彼女の指が動くたびに僕の体はビクンビクンと震えて、快感で腰を跳ねさせていった。

きもちい。

おかしいほどの快感が次々とおそってくる。

極上の乳首責め。

つぼみにかかれば、男の乳首だって性感帯に変えて悶え苦しませることが簡単なのだ。

「おねががいいッ！ ち●ぽもいじってええええッ！」

僕の懇願が繰り返される。

かれこれ1時間以上、僕は乳首だけを虐められていた。貞操帯で拘束されて、勃起する権利も奪われたまま、永遠と乳首責めをされているのだ。

貞操帯で拘束されたまま乳首責めをされていると、普段よりも乳首の快感が増すから不思議だ。

アンアンというメスの喘ぎ声が響く。絶対に愚息をさわってもらえず、その存在を無視されていると、そんなものは自分には生えていないんじゃないかという気持ちになってくる。さんざんに乳首だけを責められ自分がメスに改造されていくのが分かる。それが怖くて、射精したくて、僕は男として生かしてもらうために必死の命乞いをする。

「ち●ぽおおおッ！ ち●ぽさわってくださいいいいいッ！ お願いだからあああ、お許してくださいいいいい

いッ！」

命乞い。

それが届いたのか。

つぼみがガサゴソと自分の胸元に手をやるのが分かった。

期待に僕が目が見開く。

彼女は胸元から鍵を取り出した。それを背後から僕の貞操帯に差し込む。ガチャンと、その拘束が象徴的に解けた。

「ああああッ！ あああああッ！」

僕は感極まって言葉も喋れなくなる。

貞操帯からはずされた途端、僕の愚息は勢いよく勃起して、必死の自己主張をはじめていた。

さわってください。

しごいてください。

いじめてください。

そう浅ましい自己主張をして、バギバギに勃起した愚息が犬のしっぽのように左右に振られた。しかし、

「あ、あ、な、なんで、ち、乳首らめええッ！」

つぼみに乳首をつまみあげられる。

解放した一物に興味を示すこともない。無言の彼女が背後から再び僕の乳首責めを開始してしまった。

カリカリカリッ！

「ひいいいいッ！」

電流が走った。

僕の乳首から全身に快楽がほとぼしって、それがずっ

と続いた。

「つ、つぼみいいいいッ！」

「……………」

彼女は無言。

無言で僕の乳首をいじめてくる。

僕の愚息はバキバキに勃起したまま上下左右に暴れはじめていた。

さわってください。

お願いします。

助けてください。

先走りのツユをまるで涙のように流しながら必死に命乞いを繰り返している。しかし、つぼみは一切そこにふれることなく、乳首だけを責め続けた。耳元で、小悪魔と化した彼女がささやく。

「絶対にち●ちんはさわってあげない」

「ひいいいいいいッ！」

「聞き分けが悪い子にはおしおきだよ」

「つ、つぼみいいッ！」

「今日は乳首だけ責める。メスにしてあげるよ」

言葉責め。

あのいつも無口な彼女の言葉責めに、僕はどうにかなくなってしまいそうだった。

僕は彼女の宣言どおりに甘ったるい喘ぎ声をあげ続け、乳首の快感でメスにされていった。

この一物はもう僕のものではないのだ。

これは、つぼみのものだった。

彼女の許しがないとさわることすら許されない。  
射精だけではなく、全ての男の権利を奪われてしまっ  
た。そんな気がした。

＊

もう壊れてしまった。  
僕はつぼみに壊された。  
一日中、考えるのは射精のことばかり。  
朝起きたベットでも、  
通学途中の電車の中でも、  
講義を受けている授業中でも、  
学食でご飯を食べているときも。  
つぼみに虐められる想像を昼夜を問わず繰り返し、寝  
ても夢で犯される。  
徹底的な寸止め調教。  
僕はもう壊れてしまった。  
つぼみに壊されてしまったのだ。  
もう男のプライドも人間としての尊厳も、なにも残っ  
ていなかった。  
「しゃ、射精させてください。お願いします」  
土下座。  
部屋に入った瞬間、僕は脱兎のごとく衣服を脱いだ。  
全裸で無条件降伏して、貞操帯で拘束された役立たずの  
一物をぷるぷる震わせながら、僕はつぼみに向かって土  
下座をしたのだ。

「……………」

無言。

玄関先で、まだ靴を脱いでもいない彼女が土下座した僕のことを見下ろしている。僕はそんな彼女の足下で、頭を深く下げ、額を玄関のタイルにつけて必死に射精をさせてくださいと懇願していた。

「も、もう許してください。げ、限界です。ずっと射精したいってきもちで頭爆発しそうで、起きてる間も寝てる間もずっとつぼみのこと考えてて。も、もう許してください。射精、射精させてください」

必死に。

一生懸命。

射精をさせてくださいと命乞いをする。

無言の時間。

それが流れた後、つぼみがゆっくりと片足を振り上げるのが分かった。そのまま、僕は後頭部を踏み潰された。

「ウッ！」

後頭部に広がる靴裏の感触。

僕の顔面全体が地面に押しつけられ、そのままグリグリと蹂躪される。

痛い。苦しい。そのはずなのに、僕はとてつもなく興奮していた。

「あああああッ！」

体がビクンビクンと震える。

快感が全身を支配して歓喜していた。

僕は土下座をして頭を踏まれているだけだ。

それは屈辱的なことのはずだった。

それなのに、僕はとてつもなく興奮していた。

「マゾ」

びくん。

つぼみの言葉に僕は快感で震える。

「だいぶ仕上がってきたね」

「つ、つぼみいいいいッ！」

「君は今、マゾの快感でよがってるんだよ。わかる？」

「ああああッ！ アアンンンッ！」

「彼女に土足で頭踏み潰されて興奮してるの。わたしが与えるすべての刺激が快感になってる。情けないと思わない？」

ぐりぐりとさらに潰される。

僕の頭は快感でさらにバカになっていった。

彼女の言葉どおり、頭を踏み潰されているだけで、僕は頭の中で絶頂していた。

「一週間後」

つぼみがどこか弾むような声で、

「一週間後、射精させてあげる」

「つ、つぼみ様ああああッ！」

「それまで徹底的に寸止め調教する」

「ひゃ、ひゃだああああッ！」

「今日も絶対に射精させてあげない。がんばってね、変態マゾくん」

グリグリグリイッ！

最後にひときわ強く僕の頭を踏み潰してから、つぼみ



様が離れた。

そのまま、無言のままで靴を脱ぎ、部屋に아가ってしまふ。僕は玄関先で涙を流しながら、「射精させて……射精させてください」と弱々しくつぶやいたままだった。

## 8

つぼみは宣言どおり寸止め調教を続けた。

この1週間は、これまで以上に地獄だった。

彼女は僕に快感という名の暴力を永遠に与えていった。乳首と愚息への寸止め刺激。

僕は全裸で泣き叫び、無表情の彼女に射精を懇願して喉をからし続けた。

けれど、それも今日で終わる。

約束の日。

僕は今日、つぼみに射精させてもらえるんだ。

「つ、つぼみ、もう帰らない？」

ボランティア部の部室。

そこで僕はもじもじしながら彼女に問いかけた。

部室には他にも部員がいて、それぞれ活動をしている。そんな中であって、つぼみは念入りに幼稚園で行う予定の紙芝居講演に向けた準備を続けていた。

「まだ無理」

「で、でも」

「もう少し時間かかりそう」

「ぼ、僕も手伝うよ」

一刻も早く射精をさせてもらうために僕は必死だった。もはや主従関係ができあがってしまっている。僕は彼女に命じられる前から、彼女のご機嫌をとるための召使いのようになっていた。おそらく、彼女から人を殺してこいと命令されたら何も考えずにその通りにしてしまっただろう。それだけ僕は彼女に支配され、壊されてしまっていた。

「それじゃあ、帰ろうか」

「う、うん！」

作業が終わり彼女が言う。

僕は彼女の荷物を自分から持って帰宅の準備をすぐにする。それなのに、つぼみはマイペースに淡々と時間をかけて帰り支度をしている。それが焦らされているようで、僕はビクンと快感に震えた。

「……………」

快感に震えている僕に彼女が気づく。

無表情のままつぼみが僕の耳元に顔を寄せてくる。

近くに彼女の顔があるだけで興奮した僕の耳元で、彼女がささやいた。

「マ・ゾ」

「ひiiiiiiiiッ！」

「おあずけくらって興奮したね？」

「つ、つぼみ」

「家に帰ったらたっぷり犯してあげる」

「あああああッ！」

僕はそのままへたりこんだ。

足腰がガクガク震えて立っていられなくなったのだ。言葉だけで射精を伴わない絶頂に追い込まれてしまった。

他の部員たちが僕を見て何事かと驚いている。

しかし、そんなことはどうでもよかった。もはや、つぼみ以外のありとあらゆる事柄に僕は興味を失っていた。彼女が全てだった。つぼみという存在に僕は完璧に支配されていた。僕は地面にへたりこんだまま、こちらを見下ろしている彼女を見上げるしかなかった。

＊

自宅。

エレベーターの中で僕はもう興奮して頭がどうにかなくなってしまいそうだった。

フウフウと鼻息を荒くして、発情しっぱなし。

だから自宅のドアをあけた途端、僕はすぐにバタバタと全ての衣服を脱ぎ去って全裸になった。

「つ、つぼみ様」

「……………」

いつからか、寸止め調教される時には彼女の顔を様づけで呼ぶようになっていた。

僕は、無言のままこちらを見つめてくる彼女の足下で膝まづき、深く土下座をした。そのまま、何も言わない。僕はただただ彼女の前で無条件降伏し、自分の全てをなげうって土下座を続けた。

「……………」

すうっと彼女の片足があがり、僕の後頭部を踏み潰す。無言のままで何度かグリグリと潰され蹂躪される。そのたびに、僕の股間は爆発しそうになるほど勃起しそうになっていた。貞操帯で拘束されていなかったら、犬のように愚息を左右に振って悦んでいただろう。

「ん」

彼女が満足そうに吐息をもらした。

そのまま、彼女の手が伸びてきて、僕の髪の毛をわし掴みにする。力任せに引っ張られて僕の体は持ち上がった。そして、つぼみ様は僕の髪の毛を掴んだまま引きずるようにして、寝室へと歩いていった。

「つ、つぼみ様ああ」

髪の毛をわし掴みにされ、頭を強制的に下げられるようにして連行される。つぼみ様は無言だ。そのまま、ベットの上に僕のことを放り投げた。

「う」

あおむけになって倒れる。

その上に馬乗りになってくるつぼみ様。

僕の下腹部に腰をおろし、そのままじっと僕のことを見下ろしてくる。その冷徹な瞳が全裸になった僕の痴態を余すことなく凝視していた。

「はずしてあげるね」

首にかけた貞操帯の鍵。

それを僕に見せつけてから、彼女は貞操帯をはずした。ガチャンという音。僕の一物が解放された。既に我

慢できず先走りのツユが漏れているのが分かる。まるで犬だ。エサを前にして涎を流し続ける獣。そのように、彼女に躡られてしまったのだ。

「逃げたらまた最初から寸止め調教する」

彼女が淡々と命令を口にする。

「口答えしても最初から寸止め調教」

「っ、つぼみ様ああああ」

「私が満足するまで我慢できたら射精させてあげる」

「しゃ、射精、しゃ、射精させてええええ」

「我慢。わかった？」

「は、はひいいいいッ！」

よろしい。

そう言った彼女が僕の乳首に手を伸ばした。

はじまる。

\*

乳首責め。

彼女の手が魔性の手に変わる。

なぜこんなにきもちがいいのか分からない。

彼女の指が僕の乳首をひっかくたびに、僕の全身と股間に信じられないほどの快感が生まれる。僕の口からはひっきりなしに甘い声がもれていった。

「あひ……アアンッ……んんっ」

男の喘ぎ声。

我慢しようとするのに1度だって我慢できない。

彼女の手が僕の乳首を蹂躪するたびに、僕はびくんびくんと震え、とろけきった顔をさらして喘ぎ声を漏らすしかなかった。

「あひいいいいいいッ！」

彼女の人差し指が連続で乳首をひっかき始める。

乳首のまわりに親指と中指と薬指をがっちり食い込ませて固定化し、人差し指だけを永遠とカリカリしていく。それをやられると僕は壊れてしまう。涙を流して僕は悲鳴をあげるしかない。

「……………」

つぼみ様は僕の胴体に馬乗りになって、無表情に見下ろしてくる。

彼女のお尻が僕の胴体をむっちり押し潰しているせいで、どんなに痙攣してもベットに縫いつけにされたままだった。拘束されている。彼女の体に拘束されて、永遠と乳首責めを受けている。そう思うと、さらに興奮が増した。つぼみ様が言うマゾの快感で、僕はバカになる。

「きもちい？」

彼女が聞いてくる。

乳首をいじりながら御主人様が問いかけてくる。

「ねえ、きもちいの？」

「は、はひいいいいッ！ きもちいですううッ！」

「そう。じゃあ、ち●ちんはいじらなくていい？」

「ひゃだあああッ！ ち、ち●ぽ、ち●ぽもいじってええええッ！」

「でもコレきもちいでしょ？」

カリカリカリカリッ！

「ひゃあああッ！ しゅごしゅぎるううッ！ つぼみ様の手、しゅごいいッ！」

「そんなにきもちがいいなら、ち●ちんいじられなくてもいいよね」

「らめえええッ！ お願いですううッ！ ち●ぽもいじってくださいいいッ！」

僕は発狂しそうだった。

もしかしたら本当にこのまま乳首だけで終わってしまうかもしれない。また射精は許されず、永遠とメスの快感でよがらされるだけ。そう思うと全身に悪寒が走り、僕は泣き叫んで命乞いをはじめた。

「おねがいしゅ。おねがい、つぼみ様、射精、射精をさせてください」

「……………」

「口答えもしません。なんでもいうこと聞きます。だから、お願いします、助けて、助けてください。射精、射精させてえええッ！」

涙をぼろぼろ流す。

媚びる。

へつらう。

ご主人様に射精を許してもらうために、僕は涙を流し、眉を負け犬のように下げて、必死に命乞いを続けた。

「ふふっ」

笑った。

つぼみ様がうっすらと笑って、後ろに手を伸ばした。

「あああああッ！」

体がビクンと痙攣する。

彼女の手が僕の愚息をがっしりと掴んでいた。

掴まれただけ。

それなのに、僕は自分という全存在が彼女に握りしめられたと感じた。

「そんなに射精したい？」

「し、したいですううッ！ おねがします、射精させてくださいいいいッ！」

「どうしようかな」

ぐいいいいいッ！

「ヒイイイイッ！」

力強く僕の愚息を握り潰したつぼみ様。

彼女はそのまま快感に喘ぐ僕のことは見下ろしてきた。じいっと、容赦なく、彼女の視線が僕に突き刺さる。マゾの快感と、つぼみ様の手によって与えられている快感で、僕の頭の回路がズタズタにされていく。

「しごいてあげる」

「ひいいいいいッ」

ゆっくりと。

彼女の手が動き始める。

僕をじっと見下ろしながらの蹂躪。

その魔性の手が動くたびに、僕の体は痙攣していき、すぐに限界が訪れた。ぴくぴくと震える。僕の愚息が虫の息となって、ようやく射精ができる。つぼみ様はその様子に気づく様子もない、じいっと僕の顔を見下ろした



まま、魔性の手を動かしていただけ。あと1秒、それだけで射精できる。あと、少し——それなのに、

「おあずけ」

「ああああああッ！」

ぱっと。

つぼみ様の手が離れた。

寸止め調教。

僕はまたしても射精ぎりぎりの負け犬ち●ぽに仕上げられてしまったのだ。

「射精できると思った？」

つぼみ様が僕に馬乗りになったまま言う。

僕はあまりの衝撃で、涙をぼろぼろ流しながら「あうあう」と悲鳴をもらしていくしかなかった。

「君のち●ちんの状態なんて見なくても分かるんだよ」

「しょ、しょんなああッ！」

「手でさわるだけで君の限界も弱点も、ゼーンぶ分かっちゃうの」

「つ、つぼみさまああッ！ つぼみさまああああああッ！」

「私はその気なら今日も君は射精できないよ。アンアン泣かされちゃう」

「ひゃだああああッ！ 射精させてくださいiiiiiiiiiiiiッ！」

僕は泣き叫んだ。

涙を流し、必死に命乞いを続けた。

それをつぼみ様は無表情で見下ろし続けていた。うっ

すらと頬を赤くした彼女が、必死の命乞いをして射精を懇願していく僕のことを観察している。

「ふふっ、かわいい」

彼女がうっすらと笑った。

期待に胸が膨らむ。

彼女の機嫌がいい。

僕の命乞いを気に入ってもらえた。

もしかしたら射精させてもらえるかもしれない。

しかし、彼女はどこまでも残酷だった。

「もう少し寸止めさせてね」

悪魔。

僕には彼女が残酷な悪魔に見えた。

「もっともっと情けなく喘がせてあげる」

＊

言葉どおりだった。

彼女は僕のことを寸止めし続けた。

彼女の魔性の手が僕の愚息に襲いかかる。

鬼頭だけを容赦なくグリグリといじめられる。

竿に絡みついた長い指がイソギンチャクみたいに蠢いていく。

1時間、

2時間、

3時間。

僕はひたすら寸止めされた。

どんなに泣き叫んでも、どんなに命乞いを続けても許してもらえなかった。

僕の意識が次第にうつろになっていく。

もはや時間の経過も分からない。

外はすっかり暗闇だ。

僕はもはや何時間目になるかわからない寸止め調教の中で、人格を破壊されていた。

「うううッ！ うううッ！」

ぼかぼかと頭を叩く。

両手でいっしょうけんめい自分の頭を叩いていく。

なぜこんなことをしているのか分からない。

涙はとっくの昔に枯れていた。

白目をむいて、必死に頭をポカポカ叩く。

こうしていなければ耐えられなかった。

寸止めの後の衝撃。

それがあまりにもひどくて頭をポカポカ叩いていないと自分を守ることもできないのだ。壊れていく感覚。それにあらがうために僕は自分の頭を必死にポカポカ叩いた。

僕の頭にはいくつもの巨大なタンコブができていた。鈍い痛みがずっと続いている。それでもこの寸止め調教の拷問に比べれば可愛いものだ。

「また射精できなかったね」

誰かが僕の耳元で囁く。

僕はベットに座っていた。

その後ろに誰かが座って僕の愚息を握っている。

ずいぶん昔からこの体勢になっていた気がする。  
僕は背後から彼女に手コキをされ、射精ギリギリで寸止めをされ続けていた。



「くやしい？」

彼女の声が熱をもっている。

興奮した吐息が耳を犯した。

「男のくせに女の子にいいようにされて、くやしい？」

「ううううッ！ ううううッ！」

「もう言葉も喋れない？」

「うううううッ！ ううううッ！」

「うん、それじゃあ射精しようか」

彼女の両手が僕の一物をがしっと掴んだ。

これまでの動きが子供だましに感じられるような、そんな強烈な手コキだった。

彼女の魔性の指が僕の愚息をブっ壊していく。

強制的に、

男を射精に追い込むだけの暴力。

ねちゃねちゃといやらしい音が響く。

誰かが獣のような悲鳴をあげている。

喘ぐとかではなく断末魔の悲鳴。

それがどこからか聞こえてきてうるさい。

それでも、

それでも、耳元で囁く彼女の声はしっかりと聞こえた。

「イけ」

「ひゃあああああああッ！」

どっぴゅうううううッ！

びゅっびゅうううううッ！

ビュビュッビュウウッ！

止まらない。

僕の愚息が爆発してこっぴみじんにされてしまった。

それでも射精だけが止まらない。

彼女の手も止まってくれなかった。

「い、イってましゅうッ！ イってるからあああッ！」

「……………」

「ひゃあああッ！ も、もう、もうやめへえええッ！」

「……………」

無言。

一心不乱に射精直後の一物を蹂躪する魔性の手。

耐えられるはずがなかった。

暴れても暴れても背後から抱きしめられて逃げられない。

僕の体が命の危険を感じて痙攣し始める。

それなのに、彼女は止めてくれなかった。

射精。

射精が続く。

——彼女の手が、

射精が続く。

——暴力的に、

射精が続く。

——壊れる、

射精が続く。

続いていく。

終わらない。

命が消えていく。

消え……、  
消えて……、  
そして、本当に爆発した。

「ひっぎいいいいいッ！」

どっぴゅううううううううううッ！

っぴゅうううううううッ！

飛び散っていく。

部屋の天井まで届くくらいの勢い。

こんなの経験したことない。

壊れる。

死ぬ。

たすけて。

お願い。

たすけて。

「潮ふいたね」

背後。

つぼみ様が淡々と事実を確認する。

「このまま搾り取るね」

ぐちょぐちょぐちょっ！

魔性の手がさらに僕の愚息を粉々にする。

精液なのかなんなのかもわからない液体が股間から爆発していく。僕の体中の水分が股間から出て行くような気がした。僕の生命力が消えていく。彼女に搾り取られて殺される。このままじゃ殺されちゃう。

たすけて。

お願い。



たすけてください。

死ぬ。

やめて。

殺さないで。

たすけて。

「壊れちゃえ」

「ひiiiiiiiiiiiiんッ！」

視界がなくなる。

意識が遠のく。

快感という激痛も消えていく。

命が、

もう。

たゆたう。

耳元、

彼女の声が、

「すこしやりすぎたかな」

そうつぶやくのが聞こえた。

## 9

結果的に言うと僕は生きていた。

目が開く。

あ、生きてる。

それが最初の感想だった。

「起きたね」

つぼみの声。

僕はそこではじめて彼女の存在に気づいた。

天使が僕のことを膝枕していた。

「大丈夫？」

「う、うん。平気みたい」

「よかった」

つぼみはいつもの無表情で僕の無事を確認すると立ち上がった。

「帰るね」

「え、もう？」

「今日、1限目から講義なの」

「そ、そっか」

無表情が僕の顔をじいっと見つめた。

僕はその視線の意味が分からず何も言えなかった。

彼女はそのまま「それじゃあね」と言って、あっけなく帰宅してしまった。

「……………」

後には僕だけが残された。

部屋は片づけられている。

あの精液は全てふきとられていた。

それだけではなかった。

机の上にはアレがあった。

「て、貞操帯」

本体と鍵。

それが机の上に置かれていた。

その横には手書きで「処分しておいて」という、つぼみの書き置き。

その時はじめて、僕の股間にあの金属の拘束具がつけられていないことに気づいた。

「も、もう寸止めされないのか？」

信じられない思い。

自分の愚息が返却されたような自由な感覚。

僕は天にもものぼるきもちだった。

自由。

尊厳の解放。

そんなものに喜んでしまった僕はどうしようもないバカだった。

\*

結論から言うと本当に寸止めされなくなった。

けれどそれだけではない。

あの日から、つぼみは僕に手コキをしてくれることもなくなってしまったのだ。

「今日、家こない？」

部室で誘っても、彼女は「今日は用事があるから」とつれなかった。映画を見たりデートをしたりしても、それが終わるとすぐに帰宅する毎日だった。

1 週間がたった。

2 週間がたった。

あっという間に1ヶ月が経過した。

その間、ずっとつぼみは手コキをしてくれなかった。

悶々とした日々が続いた。我慢できないほどに性欲が

高まってしまっている。

今までだったらオナニーをしたはずだ。つぼみに手コキをしてもらえるようになる前には毎日のようにしていたオナニーで自分の性欲を解消する。男なら誰も当たり前のようにしている行為。

けれど、僕はオナニーをしなかった。

しなかったのだ。

それをするのはつぼみに対する裏切りのように思えてならなかった。

僕の愚息に貞操帯は装着されていない。

だから、しようと思ったらできる。

何度僕の右手が一物に伸びたか分からない。

けれど、そのたびに僕の手はぴたっと止まった。

「射精したい。射精。射精」

ベットの上で悶々つつぶやく。

つぼみの手の感触を思い出す。

彼女の匂いとか体温を妄想してしまう。

ハアハアと息が荒くなる。

興奮した獣が股間に右手を伸ばして——虚空で止まる。

ボタンと右手がベットに投げ捨てられる。

これが何度も繰り返された

「こ、これはもう、つぼみのものなんだ」

僕のものではない。

だから、僕が自由にしていいはずがない。

つぼみに支配され、管理されるべき存在。

ああ、貞操帯なんて関係なかった。

僕はもう、つぼみの手コキの中毒になって、彼女に支配されなければ生きていけなくなっていたのだ。

「つぼみいいい……つぼみいいい……」

僕はつぶやき、彼女のことを妄想し続けた。

僕の愚息も彼女に媚びるようにぶるぶると震え続けていた。

＊

そんなある日のこと。

つぼみからラインが入ってきた。

『今日、部屋にいてもいい？』

そのメッセージに心臓がドクンと脈打って、全身が歓喜に震えた。けれど、続いて表示されたメッセージによって奈落に落とされることになる。

『大事な話があるの』

いつもの事務的なメッセージ。

それなのに僕にはそれが他人行儀に感じられた。

彼女が部屋に来る。

なにをしに来るのだろう。

ひょっとしたら、別れ話をするためじゃないか？

『もう君とはつき合えない。彼女の手コキでアヒアヒいったり、玄関で土下座するようなマゾ男は気持ち悪いから別れてほしい』

そんな別れ話をしに来るのではないか。  
僕は絶望で目の前が真っ暗になった。  
けれども返事をしなければならぬ。  
「いいよ」と簡単なメッセージを送る。  
彼女はさっそく今日の夜に来ることになった。

＊

「こういうこと、もうやめたほうがいいと思うの」  
開口一番。  
彼女はそう言った。  
僕の部屋の中。  
お互いに正座で座った状態で、彼女は僕のことを真正  
面から見つめてそう言ったのだ。  
「手コキとかそういうの、やめたほうがいいと思う」  
じいっと僕を見つめてくる。  
いつもの無表情だ。  
けれど、どこか哀しんでいるように見えた。  
そんなに嫌だったのか？  
やっぱりマゾは気持ち悪いのか。  
僕は「そ、そうなんだ」と、そんなことを言ってから、  
「いや、もちろん、つぼみが嫌だったらしくなくていいん  
だよこんなこと。うん」  
「……………」  
「別に無理矢理とかそんなこと考えてないしさ。うんう

ん、そうだよね、嫌だよね、こんなことさ」

僕は泣きそうだった。

嫌われてしまったのだろうか。

気持ち悪いと思われているのだろうか。

僕は後悔していた。

手コキしてほしいなんてそんなこと頼まなければよかった。

僕はつぼみと一緒にいられればそれで満足なのだ。それなのに、自分の欲望を優先して、彼女に自分の性欲処理をさせてしまっていた。だから、彼女は傷ついてしまっているのだろう。僕は罪悪感でどうにかなってしまいそうだった。

「……………別に嫌じゃない」

つぼみが小さい声で言った。

「え？」

「別に嫌じゃないの」

「い、嫌じゃないって、なにが」

「君のこと手コキすること、別に嫌じゃないの」

そう言って、つぼみは視線を下に落とした。

いつも僕の顔を真正面から見つめてくるのに、今の彼女はどこか戸惑っているらしかった。

「だ、だったらなんで？ な、なんで手コキしないとかな、そういうことになるの？」

僕は必死に言った。

彼女は落としていた視線を再び僕に向けると、いつもの無表情に見える表情で、

「なんだか怖くて」

「怖い？」

「うん、私、最近自分に歯止めがきかなかったんだ」

「はどめって……」

「君のこと虐めて支配するのが楽しくて、歯止めがきかなくて、ついやりすぎちゃった」

どくん。

どくんどくん。

僕の心臓が鳴っている。わなわなと口が震えて、なかなか声が出てこない。そんな僕にむかって、つぼみが、「これが続けてたらどこまでいくか分からないからさ。怖くなって。それに、君も迷惑だよね」

「め、めめめ」

「一方的に私だけ楽しんで。そんなの迷惑でしょ？」

迷惑なんかじゃないッ！

誰かが叫んだ。

僕だった。

目の前のつぼみが瞳を見開いて驚いている。

「め、めめ迷惑なんかじゃないよ」

「……………」

「む、むむむしろ、ぼ、僕のほうが一方的に、き、きもちよくなっちゃってさ」

「でも苦しそうにしてるじゃない？ ずっと泣き叫んで」

「そ、それがいいんだよ。それが。それがいいの」

「そんなこと言っても、射精したい時に射精したいよ



ね？ 今は貞操帯はずしてるから自由にオナニーだってできるんだからそのほうが……」

つぼみの言葉が終わる前に僕はズボンを脱いだ。

パンツも脱ぎ捨てる。

あっけにとられている彼女の前で愚息をさらす。限界まで勃起した僕の分身が彼女に捧げられた。

「え？」

驚いた彼女の声。

つぼみはそのまま僕の愚息を凝視していた。

それだけですべて把握されてしまった。

僕が説明するまでもなかった。

「オナニーしてなかったの？」

「う、うん」

「な、なんで？」

「だって」

僕はなぜか涙目になって、

「こ、これはもうつぼみのモノだから。僕のものじゃないから、だから、あれから一度だってふれてない」

「……………」

「支配されたい」

「……………」

「つ、つぼみに支配されたい、です」

そう言って僕は貞操帯を取り出した。

彼女につけられていた貞操帯だ。

それを僕は肌身離さず持っていた。

それをつぼみ様にうやうやしく差しだし、

「……管理してください」

「……………」

「射精管理、してください」

僕の言葉を、つぼみは無言で受け止めた。

彼女の手が伸び、僕から貞操帯を受け取った。

それを手にした彼女が静かに言った。

「していいんだね？」

いつもの無表情の彼女。

しかし、その頬は赤らみ、興奮しているのが僕には分かった。

「君のこと犯して虐めて支配していいんだね？」

「は、はい」

「そう」

つぼみの手が伸びた。

僕の一物をがしっと掴む。

歓喜に全身が震える。

僕はこの瞬間のために生まれてきたんだ。

そんな仰々しいことを思いながら、僕は彼女にたちまち支配されてしまったことを悟った。

「本気でやるからね」

つぼみが。

無表情でじっと僕の顔を見つめながら、

「本気の手コキ。耐えられるかな」

「ほ、本気って、い、今までののは」

「手加減してたんだよ。君が耐えられないだろうと思って、手加減してあげてたの」

でも、もう必要ないよね。

ぎゅううううッ！

彼女が一物を力強く握りしめる。

痛みは感じない。

彼女の魔性の手は僕に対する刺激をすべて快感に変えてしまう能力をもっていた。僕は「うううッ」と喘ぎ声を出して、眉を下げて負け犬の顔をさらしながら、こちらを凝視してくる彼女を見上げるしかない。

「まずは私の本気の手コキを味わってもらおうね」

「つ、つぼみいいい」

「壊れないように必死に耐えるんだよ？」

「は、はひいいいいいッ！」

はじまった。

それから先のことは覚えていない。

規格外の快感の嵐に翻弄され、その間の記憶はほとんど残っていなかった。

誰かの断末魔の叫び声が聞こえる。

何度も滑稽に命乞いをしている男の声。

それを見下ろす彼女の姿。

最後。

すべて終わった後。

精巣が空っぽになっても続いた本気手コキの後に、貞操帯。

それをつけられる。

ガチャンという鍵の閉まる音。

それは僕のことを永遠に閉じこめる鍵の音に聞こえ

た。

鍵を握った彼女。

僕のすべてを支配してくれる人。

彼女が、優しげな笑みを浮かべて、言った。

「大好きだよ」

END